河川と高齢者福祉施設の立地条件に関する研究

要約
1．はじめに
2．方法
　2.1　研究1：高齢者福祉施設の立地条件と河川との関連
　2.2　研究2：高齢者総合福祉施設ケアポートよしだと河川との関わり
3．結果及び考察
　3.1　研究1：高齢者福祉施設の立地条件と河川との関連
　3.2　研究2：高齢者総合福祉施設ケアポートよしだと河川との関わり
　　3.2.1　ケアポートよしだの立地環境と河川環境整備事業（深野川）
　　3.2.2　福祉サービスと親水活動
　　3.2.3　高齢者福祉施設への温水プールの導入
　　3.2.4　ケアポートよしだと深野川、そして地域社会との結びつき
　　3.2.5　深野川を愛する２人の日常生活と川への思い
4．結論
附記
参考文献
資料

東京大学　大学院身体教育学講座　武藤芳照・太田美穂・上岡洋晴
名古屋大学　医学部整形外科　長谷川幸治
ケアポートよしだ　板垣文雄

要　約

本研究は、今後の日本の豊かな長寿社会の確立にとって大きな課題となっている高齢者福祉施設の立地条件について、次の２つの視点から議論することを目的とした。研究１：現段階で健常な中高年が、高齢者福祉施設への利用を仮定した場合、隣接する河川はどのような整備や管理状況が望ましいかを明らかにすること、研究２：すでに河川と隣接して開設している高齢者総合福祉施設の事例からその効果を明らかにすることである。

その結果、中高年が、将来、高齢者福祉施設に入所しなくてはならなくなった場合には、その施設周辺には河川があることを希望していることが明らかになった。また、その河川の特徴としては、「水がきれいで、魚がたくさん泳ぎ、人工的ではない小さくて穏やかな川」であることが示された。

一方、ケアポートよしだの事例から、多自然型河川づくりに対する地域住民の評価は高く、河川と高齢者福祉施設が隣接していること、そして学校や保育所、郵便局、公民館、商店等も近隣であることが、最良な立地環境であることが明らかになった。

福祉サービスにとって河川は有効に機能し、心身の健康の保持･増進に貢献しており、さらには高齢者のQOLを高めるものであることが示された。

温泉を用いた高齢者福祉施設への温水プールの導入は、身体への効果が大きく、また水を通した異世代間交流に役立っていることが明らかになった。

各種親水活動や行事は、地域住民間の連携･協力体制を強固なものにして地域社会の活性化に寄与しているとともに、縦のつながり（異世代間交流）にも良好な成果をもたらしていた。一方、異世代間の交流により、平素から子どもから高齢者までが、より自然に川に興味関心を抱く社会づくりに成功していることが明らかになった。

キーワード：河川、高齢者福祉施設、QOL、異世代間交流、温水プール、多自然型河川づくり

１．はじめに

人間の暮らしは、昔から河川と深い関わりがある。水のあるところに人が集まり、集落を形成し、さらには町や村が誕生してきた。水は、その循環の各過程において人々に多くの恩恵をもたらしてきたばかりでなく、各地に有形、無形の文化や伝統を育んできた[1)]。それは、現在まで継承されている水にまつわる各地域の祭事や行事にも見ることができる。

数十年前の日本人のライフステージに目を向けてみても、「○○川の産湯につかる」ことからはじまり、地域によっては「川に流す（遺品を焼却した後にその灰を）」というように、生を受けてから死に至るまでのすべての過程で人は川と密接な関係にあった。それは、つい先頃ベストセラーとなった五木寛之の随筆『大河の一滴』の中の下り「･････。その流れに身をあずけて海へと注ぐ大河の水の一滴が私たちの命だ。･･････」[2)]やNHK衛星放送が行ったキャンペーンの「20世紀日本のうた」第１位に選ばれた美空

ひばりの「川の流れのように」（作詞:秋元康、作曲:身岳章、編曲:竜崎孝路）に象徴されるように、日本人は、人生をよく川に例えるようだ。

ところで、新しい高齢者福祉の考え方は、強者が弱者を一方的に介助することではなく、お互いに助け合う場、つまり子どもから高齢者まで様々な年齢集団の者が集う多様性に富む場所である。このように「水を求めて人が集う」、「福祉（幸福）を求めて人が集う」ということは、人類にとって共通する価値や意味を持つと考えられる。

そこで、本研究は、今後、わが国にとって大きな課題となっている高齢者福祉施設の立地の条件について、次の２つの視点から議論することを目的とした。研究１：現段階で健常な中高年が、高齢者福祉施設への利用を仮定した場合、隣接する河川はどのような整備や管理状況が望ましいかを明らかにすること、研究２：すでに河川と隣接して開設されている総合福祉施設の事例からその効果を明らかにすることである。

２．方法

２．１ 研究1：高齢者福祉施設の立地条件と河川との関連

平成10年７月14～16日の期間に島根県内のA村（人口約２,680）及び平成10年８月６～９日の期間に北海道B町（人口約18,000）において、中高年を対象とした質問紙調査を実施した。A村とB町ともに標本の抽出を効率よく進めるために、当該町村の定期住民検診を受診した者を対象にして面接式により聴取した。有効標本数は、A村が、139（男性31、女性108）で平均年齢は62.4歳（38歳～77歳）、B町が469（男性192、女性277）で平均年齢は67.5歳（44歳～85歳）だった。

質問内容は、**資料１**に示した通りである。質問１では、回答者自身が高齢者福祉施設に将来入所することを仮定した場合に、施設周辺の望ましい環境について設問している。設問設定のバイアスをなくすために、質問紙の作成段階で各項目はランダムに並び替えを行っている。

質問２では、高齢者福祉施設の横に川が流れていることを想定して、回答者自身が望ましいと考える川の様子について自由回答を求めた。ただし、イメージを想起させやすくするために「よごれていない川」、「さかながたくさんいる川」の２例だけ回答方法の例として提示した。これによるバイアスは否定できないが、逆に例を列挙しなければ、特に高齢者層の回答をうまく導出できないと考えたため当手法を用いた。質問１と質問２の間は、折り返し式にして、回答者は、質問１が終了してからでないと質問２に進めないようにし、あらかじめ「川」をターゲットにしていることを分からないように配慮した。

回答にあたっては、高齢者も多く、目の不自由な方や文字の読めない方も少なくないことから、基本的に保健婦や地域のボランティア（地域の方言やなまりにも対応できるため）が、それぞれの質問を読み上げて回答してもらう、といった面接法を用いた（**写真１**、**写真２**）。可能な限り、川についての形容的表現を求め、回答者の声をできるだけ忠実に記述するように努めた。

写真１　A村での質問紙調査

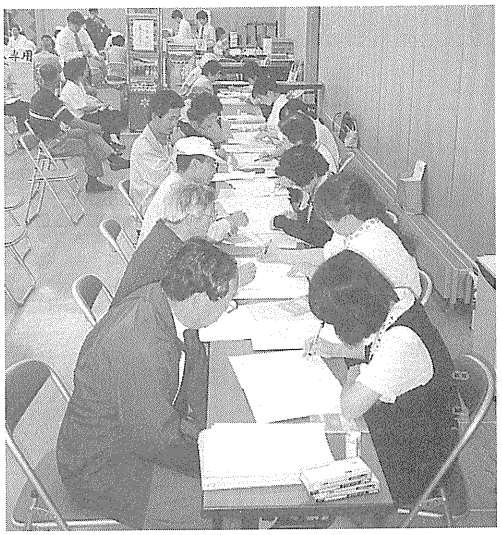


写真２　B町での質問紙調査

２.２ 研究２：高齢者総合福祉施設ケアポートよしだと河川との関わり

高齢者総合福祉施設ケアポートよしだは、人口約2,680の島根県飯石郡吉田村（過疎･農山村）に立地している。かつては、和製鉄の生産高が全国の約７割を占めていたほどの盛況を極めた「たたら」で名高い時期もあったが、現在では過疎化が進んでいる。また、高齢者人口比率は、約29％で全国に先駆けて超高齢化社会に突入している。ここでの取り組みは、日本の将来を占う意味で重要な情報発信基地となるために各分野･領域から注目を集めている。

ところで、ケアポートよしだは、吉田村の村づくりの熱意に基づき、(財)日本船舶振興会（現在:日本財団）の高齢者福祉モデル事業第２号として、21世紀の高齢化社会に過疎地域における安心で豊かな老後を築く拠点施設の役割を担うものとして建設されることになった。平成４（1992）年３月に保健･医療･福祉･建築･身体教育の専門家で構成される第1回建設運営委員会が開催され、８回の会議の末、平成６（1994）年５月に完成、開設を迎えるに至った。ケアポートよしだを中心として、吉田村全域における「安心」をテーマにした体制や施設が整備されている。その一環として、ケアポートよしだの周囲には、保育所、診療所、駐在所、深野川親水広場が建設された。

当施設の独創性を示すもののひとつとして、「水」があげられ、これは施設の建設･運営の大きな環境要因となっている。このことは、ケアポートよしだの季刊情報誌「水辺」という名称にも表れている**(資料2)**。具体的には、一級河川深野川(斐伊川の支流)のほとりに立地することと、温泉という天然資源である。

深野川を利用した深野川親水区域は、河川環境整備事業として平成８（1996）年９月に完成し、河川のもつ多様な空間特性を生かした「村民交流の場」、「自然学習の場」として活用されている。

また、温泉の効用は周知の通りだが、いち早くこれに着目して、日本の高齢者福祉施設としては、極めて斬新的な発想に基づく「温水プール」を設置した。

このように「水」に関して、理念とこだわりをもった施設が関与している各種親水活動や行事の事例を季刊誌や関連書類、あるいはインタビューを通じて明らかにした。

3．結果及び考察

3．1 研究１：高齢者福祉施設の立地条件と河川との関連

表１、２に高齢者福祉施設周辺に望まれる環境因子を示した。A村では川が61.2％で第１位、B町では31.6％で第２位にランクされた。このことは、現在の健常な中高年が高齢者福祉施設で余生を過ごさなければならないとした場合の周辺環境には、「川」の存在が重要であることを示している。

A村は、山あいの村で海まで出るのに車で約１時間程かかる中国山地にあり、主要産業は農林業でほぼ村の６割強を占めている。一方、B町は、海と山に面した立地条件下にあり、第一次産業、２次産業、３次産業のバランスは全国平均並である。こういった地域特性を鑑みても、上位３位までは、A村が「川、田･畑、森林」、B町が「森林、川、山」というように若干の順位の差こそあれ、希望される環境因子は同様の傾向があると考えられた。つまり、「緑と水」が優先することが明らかになった。さらに両地域に共通して考察できる点としては、自然豊かな環境がまず第１の優先順位であり、その次に「商店街」で代表される生活上の利便性が追随するということで、興味深い知見が得られた。

日本のそれぞれの区･市･町･村における自然環境として、海や山、田･畑は、地域によっては存在しないことが有り得るが、松浦と島谷[3]が指摘するように、川は日本のすべての地域にあり、特に市街地の水辺までの到達距離は平均して約300ｍであることを考えると、河川のもつ社会的な意義・価値は、極めて大きいことが理解でき、こうした貴重なオープンスペースをいかに有効利用するかを議論する必要がある。

2000年から公的介護保険制度が導入され、いよいよ本格的な高齢化社会への対応が現実問題になってきているが、高齢者人口比率が高まるにつれて、寝たきりや要介護高齢者も増加してくる。「自分の住み慣れた家で最期をすごしたい」と考える高齢者がほとんどであるが、そうした居宅介護サービスだけでは不十分なことは明白であり、やはり高齢者福祉施設の設立が急務になっている。しかし、「現在進行中の新ゴールドプラン（高齢者保健福祉推進10カ年戦略の見直し）でも施設の増設を目標に掲げているが、充実には程遠い状況」[4]にあり、今後、周辺環境についても中高年のニーズに答えた施設づくりが大切だと考えられた。

表３、４は、回答者が将来入所しなければならない高齢者福祉施設の横に川が流れていることを想定して、その川に対して期待する情景について調べた結果である。川についての形容表現を忠実に示したのが左の記述であり、A村、B町ともに多岐に渡っていた。その記述を要約したのが右の記述である。語意・語感に基づいて筆者らがグルーピングを行い、それぞれのカテゴリーについてのネーミング作業を行った。この手法については、若干の議論もあると考えられるが、これは一般的感覚を大きく逸脱するものではないと仮定して論を進める。

A村、B町ともに上位3位にランクされたのは、「水がきれいな川」、「魚の豊富な川」、「小さくて穏やかな川」であった。こうした一貫した結果は、中高年が望んでいる河川像は、人と自然の共有・共生可能な「多自然型河川」である、ということであり、筆者らの仮説を支持するものであった。

さらに、川の特性について多数意見を要約すると、「魚が沢山いるぐらいきれいで、小さくて穏やかな親しみやすい川」となるだろう。小さくて穏やかで人が近づきやすいこと、つまり様々な親水活動は、実は河川の物理的な条件（流速、水深、川幅等）と密接な関係にあり、強く規定されることが報告[3]されている。例えば、子どもの水遊びなら、流速は遅く、水深も浅い、いわゆる「せせらぎ」を連想させる河川構造でなければならないし、一方、ボートやいかだ遊びをするなら、ある程度の深さの水深と接岸できる構造をしていなければならない。本研究の結果、中高年の希望としては、高齢者福祉施設に隣接する河川は、前者の人が水辺に近づけるような小さく穏やかな河川であることが明らかになった。

表１　高齢者福祉施設周囲の望まれる環境因子（A村）

ランク	周辺環境	度数	%
1	川	85	61.2
2	田・畑	81	58.3
3	森林	80	57.6
4	山	77	55.4
5	商店街	58	41.7
6	学校・保育所	45	32.4
7	海	31	22.3
8	湖	26	18.7
9	沼・池	12	8.6
１０	工場	3	2.2
—	その他	13	9.4

［注］標本数139，複数回答による結果.

表２　高齢者福祉施設周囲の望まれる環境因子（B町）

ランク	周辺環境	度数	%
1	森林	200	42.6
2	川	148	31.6
2	山	148	31.6
4	海	127	27.1
5	商店街	119	25.4
6	田・畑	109	23.2
7	湖	58	12.4
8	学校・保育所	51	10.9
9	沼・池	50	10.7
１０	工場	3	0.6
—	その他	33	7.0

［注］標本数469，複数回答による結果.

表３　高齢者福祉施設横を流れる川に望む様子（A村）

水のきれいな（澄んで透き通っている）７３ 汚れていない　２９ 清流　３ 吉田川のような　２ 深野川のような　１ 奥入瀬川のような　１ ケアポートのような　１ 上から水下の見える　１ 川底の小石や砂が見える　１ 岩が見える　１ わさびでも育つような　１ 農薬・洗剤の混じらない　１ 洗い物がどこでもできる　１	水がきれいな川 １１６(83.5%)
魚がたくさんいる　６８ 蛍がいる　６ カエルがいる　３ アユが泳ぐ　２ 小魚がいる　２ 鯉などがいる　２ 小動物のいる　１ 虫がいる　１ やながある　１	魚の豊富な川 ８６(61.9%)
小さな・小川　８ 深くない　３ せせらぎの音が聞こえる　３ 適当な水の流れ　３ 穏やかに流れる　１ 岩ができる　１ 淵ができる　１	小さくて穏やかな川 ２０(14.4%)
自然な　７ 自然が残った　３ 人工的でない　２ あまり改修しない　１ コンクリートで固めていない　１ 自然のままの河川敷　１ 護岸が作られたものでない　１	人工的でなく、より 自然の残った川 １６(11.5%)
水・川遊びのできる　８ 泳げるような　３ ボートがある　１ キャンプができる　１ 子どもたちのにぎやかな声がする　１	遊べる川 １４(10.1%)
川縁に草花が咲いている　３ 草木のある　３ 木々がある　２ 四季の花が咲いている　１	草花の多い川 ９(6.5%)

［注］自由記述の要約を行った
標本数139，数値：度数（%）.

表４　高齢者福祉施設横を流れる川に望む様子（B町）

きれいな川　１８５ よごれていない川　６９	水がきれいな川 ２５４(54.2%)
魚がたくさんいる川　１３２ 釣りができるような川　１０ 鮭がのぼるような川　８ 水鳥のいる川　２	魚の豊富な川 １５２(43.4%)
小さな川・小川・小さい川　９８ 浅い川・浅瀬の川・水の量が少ない川　２２ 静かな川　１８ あまり大きくない川　１８ さらさらと音が流れる・せせらぎのある川　１７ 流れが緩やかな川・流されない川　１６ 渡れるような川　１ 細い川　１ 京都の用水路のような川　１ 安全な川　１ 雨が降っても濁らずあふれない川　１	小さくて穏やかな川 １９６(41.8%)
大きな川　３０ 流れがいい川　２ 流れの速い川　１	大きな川 ３３(7.0%)
自然のままの川　８ 石・岩のある川　８ 空気のきれいな所の川　２ 自然美あふれる川　１ 景色のきれいな　１ 護岸工事しすぎず自然が残る川　１ 淵に石がある川　１ 砂利のある川　１	人工的でなく、より自然の多い川 ２３(4.9%)
花がある・咲いている川　８ 緑の多い川　7 木もある　4 川の淵が花で飾られている　１ 季節の移り変わりが分かる川　１	草花の多い川 ２１(4.5%)
散歩できる川　３ 遊ぶことができる川　３ 友達とも会える　２ 子どもやお年寄りが裸足で入って水遊びできる川１	遊べる川 ９(1.9%)
河口付近　２ 見て楽しめる川　１ 海と山が見える川　１ 山と湖がいつも見られる川　１ 田畑を眺められる川　１ 舟の出入り可能な川　１ 曲がりくねった川　１ 少し活気がある川　１ 気がやすらぐ川　１ 汽車が見える川 街からは離れていない川　１	その他

［注］自由記述の要約を行った
標本数469，数値:度数（%）.

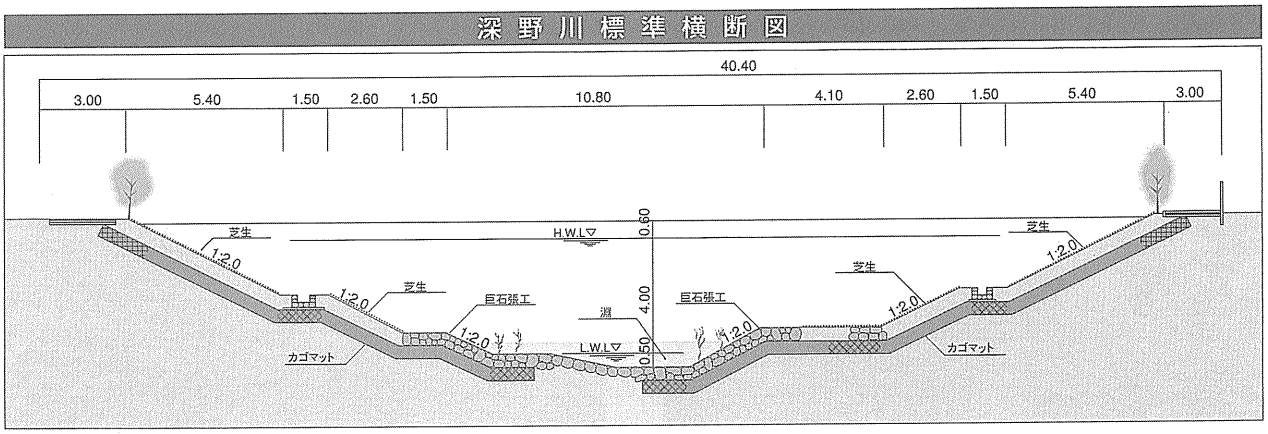
3．2　研究２：高齢者総合福祉施設ケアポートよしだと河川との関わり

3.2.1 ケアポートよしだの立地環境と河川環境整備事業（深野川）

ケアポートよしだは、従来の姥捨て山のような「高齢者福祉施設は街外れ」といった悪例とは異なり、村内のほぼ中心的な集落付近に立地している。**写真３**に示すように、施設の横には一級河川深野川（斐伊川支流）が流れ、保育所、小学校、診療所、商店等がこれを取り巻き、結合するように位置している。これにより、高齢者と地域社会との密な交流が実現している。ビヤネール[5]が指摘しているように、高齢者は人とのつながりを求めており、人が気軽に近寄ってこられず、会話すらできないような街外れの施設の立地は、いくら自然が豊かであっても好ましくない。

河川環境整備事業では、近自然工法により、子どもから高齢者までが親しみやすく、この地域の特色を生かした整備がなされた（**図１**）。このことは、杉山[6]が定義するビオトープ（生態系の具体的、現地的な姿を示すこと）に成功している。この親水広場では、様々な水性生物を見ることができ、最近では、橋脚付近でオオサンショウウオが観察されるようになっている。**表３**、**４**の中高年が期待する川の姿とほぼ一致した河川構造になっていると考えられる。

写真３　ケアポートよしだの鳥瞰図



事業概要

事業名		県単河川環境整備事業
河川名		深野川
着手		平成6年2月
完成		平成8年9月
事業費		3億5千万円
工事概要	工事長	300m
	護岸	巨石張、張芝等3.030m²
	階段工	4カ所
	飛石	4カ所
	ウォークボード	1カ所
	植栽	桜、つつじ等
	テラス	2カ所

工事の特長

- ●深野川の持つ、自然流下形態を残し、水生生物に配慮する。(淵、瀬)
- ●お年寄りや子どもにやさしい川を作る。(スロープ、階段)
- ●水遊びの出来る川を作る。
- ●植生を多用し、四季の変化を作り出す。
- ●地域の催しに配慮する。(灯籠流し)
- ●地元の特産品を積極的に使用する。(木材の多用)

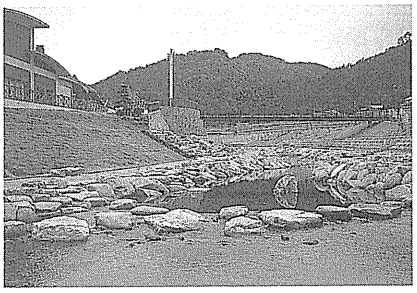


図1　河川環境整備事業（深野川）

3.2.2 福祉サービスと親水活動

ケアポートよしだは、自助・共助の概念により、居住ゾーン(ホームヘルプ事業)、介護ゾーン(デイサービス、ショートステイ、介護支援センター)、健康交流ゾーン(ヘルスアップ事業)、地域づくりゾーン(シルバー大学、職人街)、地域交流ゾーン(人材バンク、ボランティアセンター)の5つのゾーンから構成され、それぞれの機能を明確化すると同時に相互の結びつきをもつことで、福祉事業の充実を図ろうとする本格的な総合福祉施設である。

ところで、生活リハビリの基本は、外出である。高齢者や身体障害者に限らず、人間は行きたくない場所（例えば、空気が汚いようなところ）へはあえて出ようとはしない。しかし、自然が色濃く残り、風や臭いや色彩等、人間の五感をもってして心地よいと感じられる場所には行ってみたくなる。これには、河川は最適な環境となる。ケアポートよしだでは、施設を利用する高齢者には、折にふれて深野川周辺を散歩（車椅子移動）してもらったり、機能回復訓練も可能な限り親水広場で行うことを推奨し、心とからだの癒やしの効果を得ている（**写真4、5**）。例えば、リハビリとしての歩行訓練も、毎日毎日繰り返し施設や病院の中の狭く空気のこもった場所で行っていたら、気も滅入ってしまいがちである。しかし、せせらぎを聞き、自然に抱かれながら訓練をしているのであれば、意欲や生きる勇気も湧いてくると考えられる。本荘第一病院[7)]でも、同様な取り組みにより大きな成果を得ている。このように、高齢者福祉施設と河川は、高齢者のQOLにも強く関与する論題であることが改めて示唆された。

写真4　深野川に渡された鯉のぼりを楽しむ高齢者

写真５　河川敷でグランドゴルフを興ずる高齢者

3.2.3 高齢者福祉施設への温水プールの導入

高齢者には、関節疾患等に伴う疼痛を有する者が非常に多い。こうした者に対して、水中運動は、水の力学的特徴である水圧、浮力、抵抗、水温により、症状を悪化させることなく、有酸素性作業能力の向上や筋力の低下を防ぎ、さらには肥満等の生活習慣病の予防や改善にも有効であることが知られている[8)13)]。

ケアポートよしだでは、「温泉という地の利」をいかして、高齢者福祉施設としては画期的である温水プールを導入した。設備概要[11)]としては、最長部15m、水深110cm、面積110m²で遊離残留塩素0.04ppm以上を維持する自動水質監視方式で水温･室温ともに29～31度に保たれている。入水への安心感を増し安全性を高めるために、水中照明を設置している。プール全周には、手すりを設置し、泳げない人でも水中歩行や水中ストレッチングができるように工夫されている。また、屋外デッキと連続したプールサイドは、広い面積が設けられ、一般的なプールとは異なり、泳がなくてものんびりと過ごせるような安心感と快適さが得られるのがこのプールの特徴である。プールに附属して、屋外気泡プール（ジャグジー）、打たせ湯、サウナといった設備も充実している。

高齢者福祉施設内にあるので基本的には高齢者を中心としたプールであるが、子どもから高齢者まで、村内外を問わず自由に利用できる（**写真６、７**）。したがって、様々な世代の人が一緒に水中運動や水泳をしている様子を常時見ることができ、地域の健康増進に寄与している。そして特筆すべき点は、「水を通した世代間交流」ができていることである。子どもや青壮年にとっては、より自然な形で社会教育が浸透し、一方、高齢者のQOLにとっても良好な刺激となっている。

プールの利用状況[12)]も**資料３、４、５**に示すように、人口約2,680の村としては、かなり多くの利用者を獲得し、年間を通じても安定しており、人気が高いことが伺える。高齢者に対する効果としても、健常な高齢者（シルバー大学）を対象とし、水中運動を中心とした教育により、２年の加齢にもかかわらず、移動能力の維持、そして女性においては、血清脂質（HDLコレステロールの増加、中性脂肪･総コレステロールの減少）の有意な向上があったことが報告[13)]されている

このように、ケアポートよしだの温水プールは、良好に機能しており、深野川の親水活動と有機的に結合している。これは、まさに「水」のもたらす成果である。しかしながら、心配される最悪な事態（プールでの死亡事故）は、これまで発生していない。

写真６　高齢者の水中歩行

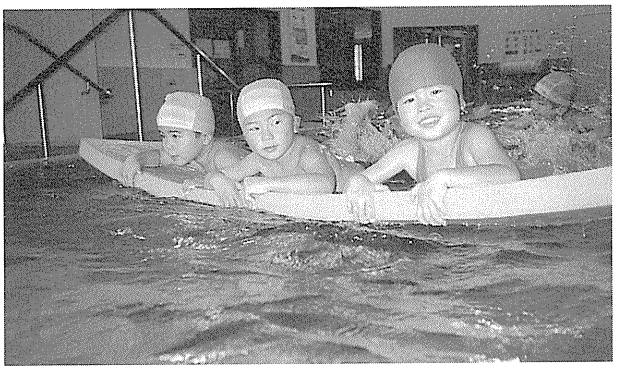


写真７　保育所の水泳教室

３.２.４ ケアポートよしだと深野川、そして地域社会との結びつき

ケアポートよしだと深野川を拠点として、様々な親水活動や行事が開催されている。例えば、7月中旬に開催される「かじか祭り（夏祭り）」では、季節の移り変わりを「深野川」中心に据えて祝う行事である。その中味は、屋台村やうなぎの蒲焼き実演と試食、各種アトランクション（**写真８**）、保育所との交流会（**写真９**）、そして夕刻には、まさに小説「蛍川」のような夕べを楽しみながらの花火大会等が催されている。子どもから高齢者まで地域の人が集い、夏の訪れを総出で祝っている（**写真10**）。

秋口には、「ふれあいロード･マラソン大会（**資料６**）」が開かれている。ケアポートよしだが、その出発とゴール地点になり、深野川沿いに各年齢に応じて定められた自然の地形に富んだコースを走破するものである（**写真11**、**12**）。

春には、深野川で「鱒のつかみ取り大会」が開催され、これも人気を博している（**写真13**）。プールや小さな池でのいわゆる人工的なつかみ取りとは違い、自然そのままの川に鱒を放流してのものなので、子どもたちは、川の流れや岩につまずいて、何度も転倒しながらの挑戦となっている。ここでも、子どもたちは、手慣れた地域の中高年に指導を受けながら、そしてその背中を見ながら学習し、魚を力強く手にしたときの達成感を味わうことになる。

このような行事は、川と高齢者福祉、地域住民との交流をより強固にする有効な手段ではあるが、やはり人為的･人工的な働きかけでしかない。大切なのは、より自然なかたちで地域住民が、川に興味を抱くこと、福祉に関心を寄せること、そして肌でふれることである。ここでは、それに成功している。

例えば、夏になると川に自発的に入って水遊びをしたがり（**写真14**）、「水の大好きな子ども（**写真15**）」が育っている。また、**写真16**は、デイサービスで深野川周辺を散策しているとき、近くの中学生がたまたま課外活動で川に来ていて、生徒は知り合いの高齢者を見つけるやいなや、すぐに駆けつけ言葉を交わし、車椅子を押している様子である。このように、子どもから高齢者まですべての者が、深野川を愛し、そして相互理解が深いことがわかる。こうした異年齢集団の交流は、現代日本の教育問題のひとつとして大きく取り上げられている「心の教育」にも良い影響をもたらしていると考えられる。とりわけ、高齢者と子どもは、相互の相性がいいことが知られており（**写真17**）、河川のビオトープについても、高齢者が、より自然に昔の川周辺の情景を子どもたちに伝え、素直に子どもたちは耳を傾けてそれを学習し、先人たちが大切してきた河川をより一層愛する、といった好循環を形成することができていると考えられる。

写真8　かじかまつりのアトラクション

写真9　3世代交流の1コマ

写真10　参加者が肩を寄せ合っての食事

写真11　親子マラソンの出発

写真12　深野川に沿ったコース

写真13　鱒のつかみ取り大会

写真14　川で自分の服を洗濯する園児

写真15　プール（水泳）を楽しみにしている園児

写真16　より自然な異世代間交流

写真17　人とふれあうことの喜び

3.2.5 深野川を愛する2人の日常生活と川への思い

資料7、**8**は、地域在住者で深野川を愛する2名の日常生活や川への思いを取材したメモである。まず、大島氏は漁協の組合員として活動し、河川への不法投棄を取り締まったり、魚を増やす努力をしている。また、個人的にも、鯉をケアポート横の親水広場に放流するなど、社会的活動にも貢献している。生態系に関する学術的知見としては、一種類の魚や地域の河川産ではない稚魚を放流することは、モノカルチャーを作り出したり、あるいは地域特有の種（生物）の遺伝子を汚染する可能性がある、という批判的な議論もあるかもしれない。しかし、手をこまねいて何もしないよりはずっとましであるし、何より大島氏の高齢者福祉施設と川への社会的援助･協力は、実に尊いものである。取材の会話の中で、河川の整備は良いが、事後の管理面の予算まで長期的な展望をもって実施すべきである、という指摘は極めて重要である。

菅野氏は、ショートステイの入所者で、ケアポートよしだから深野川周辺の毎朝の散歩を欠かさず、歩行訓練を行っている。しかし、これは単なるリハビリの一環というよりも、散歩して川を眺めながら、生きていることを実感し、時として幼少時代から現在までの自分の生い立ちや親族、友のことを思い出すノスタルジックでありながらも、心地良い時間のように考察できる。ケアポートよしだに対する評価では、「自然が豊かで商店や郵便局等があることによる生活上の便利さと立地条件の良さ、子どもから高齢者までゆったりと川を楽しめる」とあり、**表1**、**3**や**3.2.4**での記述を支持する内容となっている。また、ガン末期やエイズなど、不治の病と闘っている人のターミナル･ケアのことまで指摘している。これは、人間のQOLにとって河川は貴重な自然環境のひとつであることを改めて示唆するものである。

4. 結論

1)中高年が、将来、高齢者福祉施設に入所しなくてはならなくなった場合には、その施設周辺には河川があることを希望していることが明らかになった。

2)その河川の特徴としては、「水がきれいで、魚がたくさん泳ぎ、人工的ではない小さくて穏やかな川」であることが示された。

3)ケアポートよしだの事例から、多自然型河川づくりに対する地域住民の評価は高く、河川と高齢者福祉施設が隣接していること、そして学校や保育所、郵便局、公民館、商店等も近隣であることが、最良な立地環境であることが明らかになった。

4)福祉サービスにとって河川は有効に機能し、心身の健康の維持に貢献し、さらには高齢者のQOLを高めるものであることが示された。

5)温泉を用いた高齢者福祉施設への温水プールの導入は、身体への効果が大きく、また水を通した異世代間交流に役立っていることが明らかになった。

6)各種親水活動や行事は、地域住民間の連携･協力体制を強固なものにして地域社会の活性化に寄与しているとともに、縦のつながり（異世代間交流）にも良好な成果をもたらしていた。一方、異世代間の交

流により、平素から子どもから高齢者までが、より自然に川に興味関心を抱く社会づくりに成功していることが明らかになった。

附記

1999年は、国際高齢者年である。本研究から、高齢者は自分の老後には、河川が近くにあることは重要で、寄せる期待も大きいことが明らかになっている。そして、河川に対する視点は、治水・利水・親水あるいはビオトープという方向だけではなく、惜しくも脆弱化してきている「異年齢集団交流を築く流れや架け橋となる」こと、つまり福祉･教育の拠り所となりうることを多くの人に知ってもらえればと切に願うしだいである。

参考文献

1）国土庁長官官房水資源部編:平成10年度版日本の水資源−地球環境問題と水資源，pp.327,1998.

2）五木寛之:大河の一滴，人はみな大河の一滴（小さな人間像への共感），幻冬舎，東京，pp.20-24，1998.

3）松浦茂樹，島谷幸宏:水辺空間の魅力と創造，鹿島出版会，東京，1996.

4）宮武剛:よくわかる公的介護保険，毎日夫人，457:4-9，1998.

5）ﾋﾞﾔﾈｰﾙ久美子:ｽｳｪｰﾃﾞﾝ･超高齢社会への試み，ﾐﾈﾙｳﾞｧ書房，東京，1998.

6）杉山恵一監修：みんなでつくるﾋﾞｵﾄｰﾌﾟ入門，合同出版，東京，1997.

7）ｳｪﾙﾈｽ研究会編：福祉の川づくり懇談会ﾚﾎﾟｰﾄ'98「福祉」と「川づくり」，財団法人国土開発技術研究ｾﾝﾀｰ，東京，1998.

8）有吉譲，永田見生（分担執筆）:「水中運動･水泳」，田島直也，武藤芳照，佐野忠弘編，中高年のｽﾎﾟｰﾂ医学，南江堂， pp.218-225，東京，1997.

9）杉岡洋一，武藤芳照，伊藤晴夫編：変形性膝関節症の運動･生活ｶﾞｲﾄﾞ，日本医事新報社，東京，1997.

10）菊地臣一，武藤芳照，伊藤晴夫編：変形性脊椎症の運動･生活ｶﾞｲﾄﾞ，日本医事新報社，東京，1998.

11）武藤芳照，太田美穂，上岡洋晴ら：過疎地域における高齢者福祉施設への温水ﾌﾟｰﾙの導入とその活用，(財)地域社会研究所平成8年度研究助成報告書，1997.

12）ｹｱﾎﾟｰﾄよしだ：平成10年度の取り組み，日本財団ｹｱﾎﾟｰﾄよしだ第4回運営委員会資料，1998.

13）Kamioka H.，Mutoh Y.，Ohta M. et al. ：Effect of education of exercise and life-style to the elderly，Gerontology（投稿中）.

資　料

資料１　高齢者福祉施設の立地と河川に関する質問紙

資料1　高齢者福祉施設の立地と河川に関する質問紙

1.もし将来、あなたが高齢者福祉施設（特別養護老人ホームなど）に入って、一生そこで暮らさなければならなくなったと仮定します。
　その施設のまわりの環境として、どのようなものがあったらいいなあ、と思いますか？
　あてはまるものすべてを、○でかこんでください。

・商店街　・山　・沼や池　・海　・川
・学校や保育所　・湖　・田や畑　・工場
・森や林
・その他（　　）

----------折り返し----------

2. その高齢者福祉施設のよこには、川が流れているとします。どのような川であってほしいですか？
　自由に書いて下さい。

例）よごれていない川、
　　さかながたくさんいる川　など

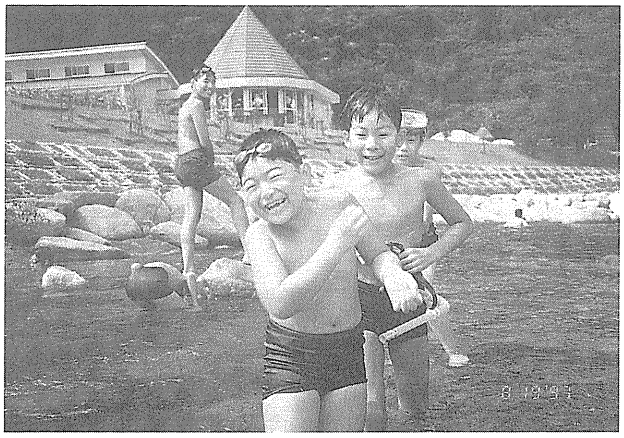
資料２　ケアポートよしだの季刊情報誌「水辺」

資料2　ケアポートよしだの季刊情報誌「水辺」

水辺（みずべ）

秋季号
ケアポートよしだ
1997・季刊情報誌
Vol. 11〔10月号〕
発行／社会福祉法人吉田村福祉会

特集：互いに支え合う地域に向かって



川で遊ぶ子供達の歓声も過ぎ去り、気がつくと日一日と秋がふかまる今日この頃です。

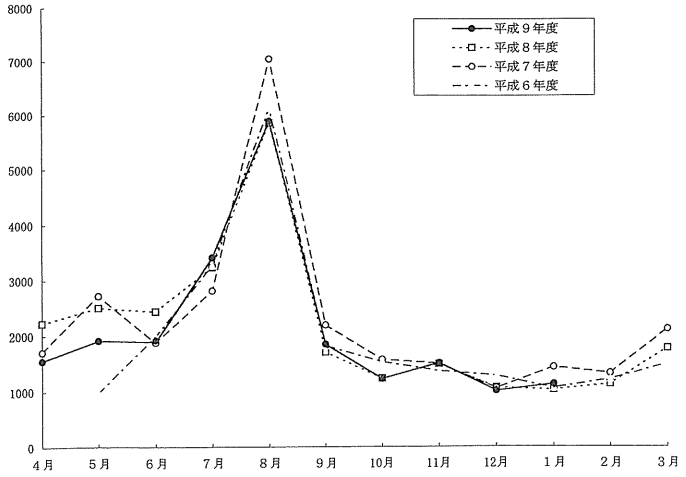
資料３　プールの利用状況（一般利用者）

リフレッシュセンター　一般の利用状況

平成９年度

（単位：人）

区分		４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月	合計	平均
村内	大人	297	385	294	394	503	310	252	289	274	274			3,272	
	小人	122	154	112	243	554	163	112	79	81	108			1,728	
	小計	419	539	406	637	1,057	473	364	368	355	382			5,000	
村外	大人	803	937	972	1,553	2,340	956	655	869	537	592			10,214	
	小人	330	443	513	1,227	2,490	407	208	270	123	162			6,173	
	小計	1,133	1,380	1,485	2,780	4,830	1,373	863	1,139	660	754			16,397	
月計		1,552	1,919	1,891	3,417	5,887	1,846	1,227	1,507	1,015	1,136	0	0	21,397	
累計			3,471	5,362	8,779	14,666	16,512	17,739	19,246	20,261	21,397	21,397	21,397		
平成８年	月計	2,230	2,508	2,438	3,243	5,855	1,707	1,238	1,491	1,074	1,034	1,135	1,768	25,721	2,143.4
平成７年	月計	1,712	2,724	1,876	2,816	7,042	2,190	1,572	1,500	1,064	1,440	1,329	2,112	27,377	2,281.4
平成６年	月計		985	1,983	3,277	6,129	1,823	1,533	1,367	1,291	1,067	1,219	1,492	22,166	1,847.2



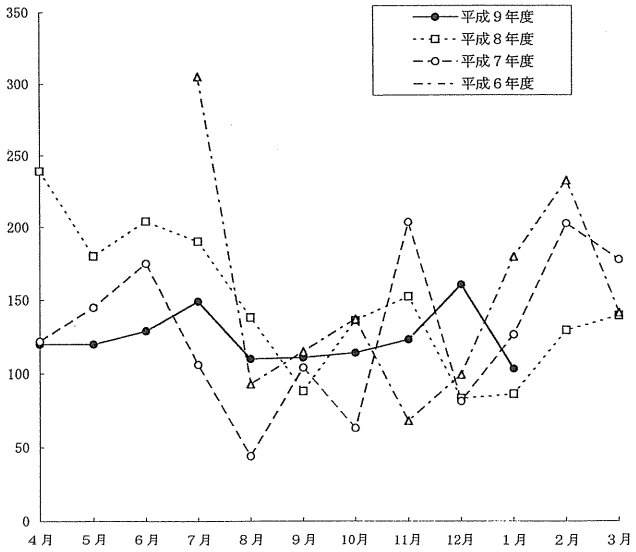
資料４　プールの利用状況（シルバー大学参加者の利用）

ヘルスアップ　利用状況

平成９年度

（単位：人）

区分	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月	合計	平均
体力テスト														
運動指導	120	120	129	149	110	106	114	123	160	103			1,234	
自主トレーニング						5								
利用月計	120	120	129	149	110	111	114	123	160	103	0	0	1,234	
平成８年利用合計	239	180	204	190	138	88	136	152	83	86	129	139	1764	147
平成７年利用合計	122	145	175	106	44	104	63	203	81	126	202	177	1,548	129.0
平成６年利用合計				305	93	115	137	68	99	179	232	141	1,369	114.1

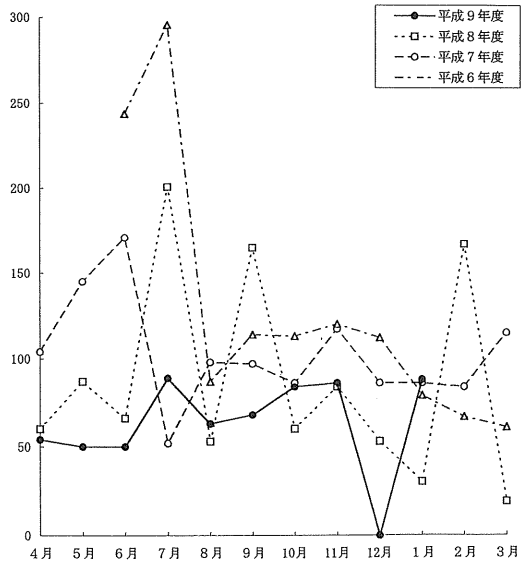


資料５　プールの利用状況（学校･保育所の利用）

学校・保育所　利用状況

平成９年度

区分	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月	合計
利用人数	54	50	50	89	63	68	84	86	0	88			632
利用グループ	5	4	4	6	5	5	7	6	0	7			49
平成８年利用人数	60	87	66	201	53	165	60	84	53	30	167	19	1045
平成７年利用人数	104	145	171	52	98	97	86	117	86	86	84	115	1,241
平成６年利用人数			244	296	87	114	113	120	112	79	67	61	1293



資料６　ふれあいロード･マラソン大会プログラム表紙

資料7

深野川を愛する人　大島儀市氏
　昭和4年9月16日生まれ68歳
　身長168cm、体重62kgの筋肉質
　斐伊川漁業協同組合田井地区支部長

大島氏の祖父の代から現在の土地で生活を始めた。退職となる60歳までは、松江（現在:宍道町）の中島製作所（ミシンの部品製作）に勤務していた。父も漁協の組合員で、子どもの頃から父親の背中を見て育ったためか川で水浴びをしたり、魚とりをするのが大好きだった。そして、父を追って18歳から組合員となり、現在では60人の組合員を抱える田井地区の支部長（1993年から）を務めている。組合での仕事は、主に稚魚の放流や河川の密漁や不法投棄等を防ぐ監視である。ケアポートよしだのすぐ横を流れる深野川にも組合の仕事として、様々な魚の稚魚を毎年放流している。例えば、あゆ（約5千匹）は年に2回5月下旬と6月上旬、うなぎ（約5百匹）は年に1回5月中旬、やまめ（約7百匹）は年1回9月上旬、鯉（3百匹）は年1回6月上旬、そしてさわがには年1回秋口である。

現在では、毎日昼間に2時間から4時間、時には昼食を忘れて川を歩いている。また、投網をして鮎をとるのが好きだという。取材した前日には、今年最大の大きさの鮎（体長25cm、重さ120gの鮎としては大物）をとったと、冷凍になっている実物を嬉しそうに見せてくれた。取材した日も、実際に投網をやっている様子をできれば見せていただきたいと話したところ、目を輝かせて「いいですよ！」と応じてくれた。お話を聞いているときは、優しく物腰静かな方に見受けられたが、一旦水にはいると、稟とした顔立ちになり、勇ましい男の姿となった。鮎を求めてどんどん川の中を移動していき、若いにもかかわらず、不慣れな私は滑ってカメラを持ったまま、何度も転んでしまった。そうした私を後目に、大島氏は、写真の演出をすることもなく、勝手気ままに獲物を目がけて網を広げていた。そして、重さ4.5kgの網を巧みにコントロールし、「結構これは重労働だよ！」と言いつつ、時間にしてわずか1時間30分であったが、見事に8匹の鮎をとった（**図18、19**）。そして、「晩酌のつまみに持って行っていいよ！」と新鮮とれたての鮎を全部くれた。

私は、投網を投げているのを始めて見たわけではないが、水中ﾒｶﾞﾈをしているのは珍しかった。1度投げ入れた後に、魚が入っているかどうかを顔をつっこんで確認し、そして魚を追いつめて、エラをすかさず剥き弱らせる。最後にたぐり寄せてつかむ、という手順であった。恐らく、浅瀬であることと、大小の岩場でやっているため、魚を逃がさなくするためだと考えられる。

ところで、大島氏のプライベートな活動として、錦鯉を深野川に放流している。これまで18匹ケアポートよしだ横に放流したが、大水のため2匹だけがその優雅な姿を今も見せている。「高齢者福祉施設横に放流することによって、橋の上からお年寄りや子どもたち（保育所や小学校が隣接する）にその優雅で心なごむ錦鯉の美しい姿を見せてやりたい。」とのことであった。

放流をしているのに、投網で鮎をとるのが趣味だ、という大島氏の行動は一見矛盾しているように思え

た。そこで尋ねたところ、鮎は放流してもその命は１年で冬は越さない。だから、鮎はとって（食べる）やったほうが良い「鮎の命は短いので、お金を払って採ってほしい。」、ということだった。これは、もちろん遊漁料を払っての話であるが。一方、放流した他の魚は、何年も生きるので鑑賞する、自然を昔に戻すためにとらない、という。

いずれにせよ、最近では水も汚れてきており、魚だけでなく蛍の数も減っているという。さらに印象深い言葉は、「川を工事する度に魚がいなくなる。そして、そこに魚が戻ってくるには長い月日が必要だ。」、「予算が出て川を整備することはいいが、そのままの状態の場合が多い。例えば、草が生い茂りすぎて、蛇なども出て、子どもにとっても安全な憩いの場ではなくなってしまう。管理面の予算を考慮して河川を整備すべきだし、それが無理なら地域の人がボランティアをしなければいけない。」と話していたことである。

取材日：平成10年8月17日午後2時　大島氏自宅及びケアポートよしだ横の深野川にて
取材者：上岡洋晴

写真18　投網名人

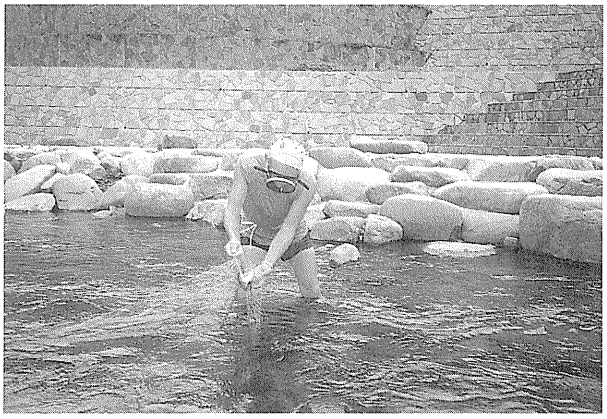


写真19　獲物（鮎）を手にする大島氏

資料8

深野川を愛する人　菅野武雄氏
　81歳　大正6年7月3日生まれ
　ケアポートよしだショートステイ入所者

菅野氏は、高校卒業後、鐘紡に入社し、途中戦争のため兵役について、昭和20年12月に故郷の吉田村に帰郷した。そして、昭和21年に吉田村の民谷地区の山奥（八重滝の上部）の山を購入し、切り開いて畑を開墾した。茶畑（手もみ）を中心に農業を行っていた。ずっと一人暮らしで、母親の手伝いを受けて農業を営んでいたが、母親の逝去にともない、鐘紡時代の技術を生かして、日東紡に再就職をした。54歳～70歳まで臨時工として日東紡の伊丹工場で染色加工の職に就いた。その後、また故郷の家に戻り、小規模の農業を行っていたが、81歳の平成10年4月に急性の腸閉塞（脱腸）で緊急手術となった。ひ

とりで山奥に住んでいたことから、身内の助言により、退院後ケアポートよしだにショートステイすることになり、現在に至っている。

趣味は、若い頃から読書ということで、歴史書や宗教に関する図書が好きだという。つい最近も、吉川英治の「太閤記」全12巻を読んだという。そのためか、会話の端々に、故事成語のような難しい単語も織り交ぜられており、熱心な読書家といった片鱗が見受けられた。

菅野氏は、ケアポートよしだに入所してから、毎朝6時前に深野川周辺を散歩するのが日課になっている（**写真20**）。これは、長らく入院して体力が落ちているため、歩行訓練（リハビリ）として行っているという。時間は、現在15分程度だが、少しずつ時間と距離を伸ばそうと考えている。コースは、深野川に沿って、川の様子を眺めながら歩いている。時に、橋の上から川面を眺めるという。ずっと眺めていると、長く山奥でひとり暮らしをしていたため、前の家を思い出し、懐かしくなるとのことだ。

ケアポートよしだの施設及びソフト面については、「もったいない程すばらしい。自然の豊かな地にあり、空気もきれいだ。同時にすぐ近くには色々な商店や郵便局もあり、生活上も便利である。食事も野菜が主体となっていて味もいい。部屋も個室で自由でよい。人心地がして、ゆっくり休まる。施設の周辺には散歩道もあって立派である。子どもも、大人もゆっくりと施設を利用したり川を楽しめる。」と話していた。

希望としては、「ターミナルケアとしてのホスピスを隣接してもらうと尚良いだろう。」と語っていた。さらに、「できれば、前のように元気になって、家で暮らしたい。」と最後に述べていた。

取材日：平成10年8月18日午前6時　ケアポートよしだ・深野川周辺にて
取材者：上岡洋晴

写真20　菅野氏の健康ウォーキング

信濃毎日新聞

夕刊）　1998年（平成１０年）7月11日（土曜日）　4

スポーツと健康

<133>

武藤　芳照

豊かな川の流れ　五感を刺激 心いやす

「20世紀日本のうた」というNHK衛星放送が行ったキャンペーンで第1位に選ばれたのが、美空ひばりの「川の流れのように」だ。ゆるやかにとめどなく流れる川の姿に「それもまた人生」と感じ、多くの日本人が共鳴しているのだろう。

島国の日本には全国すべての地域に多くの川が流れ、人々の生活に密着している。川は愛され大切にされてきた。

川中島は歴史合戦の舞台となり、千曲川は島崎藤村の詩情を誘い、カッパは人々の空想の世界を広げた。

「うさぎ追いしかの山、こぶなつりしかの川」と歌われるように、川は子どもたちの自然遊園地だった。魚を釣り、ささ舟を浮かべて流す。

川に入って水かけをし、大きな石を動かし堰（せき）をつくる。上流目指し、水中を行進して探検ごっこをする。

もちろん川の中を泳ぐこともできる。温水プールとは違って、流れに乗れば驚くほど速く泳げるが、逆らえばほとんど前に進まない。

水温の変化も急激だ。温かいと思っていたら、あっという間に冷たい感触が体を刺激して「ゾクッ」とする。今は、社会時評で「温度差」という言葉が流行しているが、川の中の温度差は格別だ。

アマゾン川など長大な川を泳ぐのを競うオープン・ウオータースイミングの選手たちの話を聞くと、自分の足をピラニアがかじっているのを感じて泳ぐこともあるという。

全国の都市には公園の面積をはるかに上回る水辺があり、比較的短い距離で水辺に達する（国土庁調査）。川には風があり、水の香りが漂い、流れが時々刻々と変化し、水面がきらめいている。

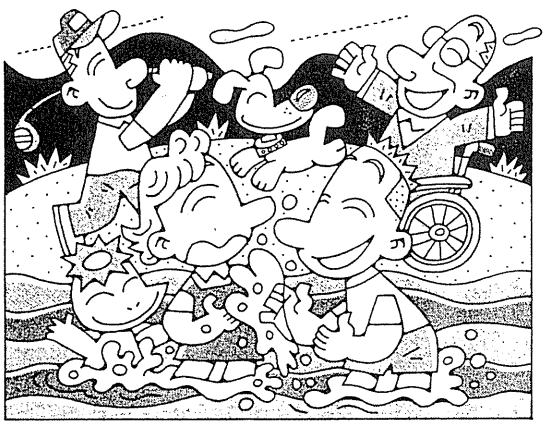
川の近くに身を置いているだけで、自然な形で五感が刺激され、心がいやされる。

河原は集いの場だ。散策を楽しむ人や犬。ゴルフの打球練習をする大人や野球、サッカーに興ずる子ども、ゲートボールに熱中するお年寄り。車いすの人も、川の近くで久々の開放感を味わう。

全国には、悪臭を放ち汚濁し、生きものも育たないような川も少なくない。そうした状況を放置し無視し続けているうちに、人々は自然を失い、感性と体と心のすこやかさを失ってきたように思う。

今一度、川の流れを見つめることが必要だろう。豊かな川の流れが、人間と文明と歴史をはぐくんできたのだから。

（東大教授）



（イラスト・桐井聖司）